

〈調査報告〉

上宮寺所蔵・清沢満之直筆「俗諦と道德との交渉」注解<sup>\*</sup>

川口 淳

凡例

- ・直筆原稿の翻刻引用にあたって、原稿で一本の取り消し線で訂正されているものは取り消し線（例）「俗諦」を用い、抹消と考えられる場合は二重取り消し線（例）「俗諦」を用いてあらわした。また判断できない文字は「■」を用いてあらわした。
- ・便宜上、清沢満之直筆原稿「俗諦と道德との交渉」は「原」と略記し、『精神界』所載論文「宗教的道德（俗諦と普通道德との交渉）」について「精」と略記して記した箇所がある。

<sup>\*</sup>編集委員会注 翻刻の全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp>) の左記のURLに掲載。

<http://id.nii.ac.jp/1374/00007643/>

## はじめに

清沢満之は、「近代日本の黎明期に現れた実存的な宗教思想家であり、また開明的な仏教運動家」<sup>1</sup>である。清沢は幕末の文久三（一八六三）年に生まれ、明治三六（一九〇三）年、享年四一歳で亡くなっている。真宗大谷派に所属し僧侶として生きたために、「宗門外ではほとんど忘れられた思想家」<sup>2</sup>であり強い関心がもたれなかった。しかし岩波書店の『清沢満之全集』刊行（二〇〇二～二〇〇三）をきっかけとして、宗門内だけではなく、さまざまな分野で清沢思想に関する研究が提出されている。

特に精神主義期に関する研究成果は多い。精神主義は、明治三三（一九〇〇）年、清沢、暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎らが、東京の森川町において共同生活を始め、そこに浩々洞の名を掲げ、その浩々洞を拠点に雑誌『精神界』を発行（一九〇一年一月より）し、仏教、特に親鸞の信仰を仏教用語に縛られない創造的な言葉で表現した、明治期の思想史上特筆すべき信仰運動である。清沢や清沢と親しかった仲間が展開した精神主義に関する研究は、現在、精密化した研究報告により、さまざまな評価がなされている。それらの学術的関心にとめない、直筆原稿の重要性も高まっている。

本稿で扱う「俗諦と道徳との交渉」は、「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」と題して<sup>3</sup>、明治三六年五月一〇日発行の『精神界』第三巻第五号に発表された論説の「直筆原稿」である。「俗諦と道徳との交渉」が愛知県の上宮寺に所蔵されていることは、これまでたびたび言及されてきたものの、ほとんど顧みられることはなかった。その重要性に鑑み、筆者はこの直筆原稿の調査翻刻をおこなった。本稿では、この直筆原稿からみえてくるいくつかの事柄を報告したい。

## 一、直筆原稿の所在

「俗諦と道德との交渉」は、愛知県岡崎市にある佐々木月樵の自坊、太子山上宮寺の所蔵である。この所蔵について言及している書籍は以下のものである。

- ① 暁烏敏・西村見暁『清澤満之全集』第六卷、法藏館、口絵写真。
- ② 教学研究所 編集『清沢満之 生涯と思想』真宗大谷派宗務所出版部、二〇〇四年、一三九頁。
- ③ 「よみがえる上宮寺の法宝物」図録編集委員会 編集『よみがえる上宮寺の法宝物 蓮如上人如光上人五百回御遠忌記念』太子山上宮寺、二〇〇四年、一〇六頁。

本原稿は現在「句佛の清沢満之の死を歎く書状の後に、引き続き〔佐々木〕月樵の手によって表装され収められ」、巻末には清沢が浩々洞に宛てた葉書が添えられている。原稿は「日本佛教學會」と書かれた三五字二六行の九一〇字詰め原稿用紙一〇枚であり、本論では最初の用紙の右側を一頁、左側を二頁と呼び、それに準じてページ数を付した。

## 二、直筆原稿研究の意義

近年の研究動向を参照しながら直筆原稿の研究の意義を述べておこう。直筆原稿と『精神界』に発表された論考について、可能な限り検討をおこなうことは研究上、そもそも重要である。法藏館版『清澤満之全集』（全八巻）の後継となる、新たな全集を刊行する計画の一端として、『精神界』紙上の論文と直筆原稿、及び法藏館版全集所収論文の校勘がすでにおこなわれている。<sup>5</sup> 安富信哉「清沢満之『精神界』所載論文校訂集」<sup>6</sup>の成果がそれである。そこでは「宗教的道德

（俗諦）と普通道德との交渉」について『精神界』所載のものと、法藏館版『清澤満之全集』所載のものととの校勘がなされている。また加来雄之の「清沢満之と多田鼎の宗教言説観」<sup>7</sup>は「絶対他力の大道」と『臘扇記』との差異について、直筆に着目して考察している。

山本伸裕はそれらの研究に留意しつつ、『精神主義』は誰の思想か<sup>8</sup>において、精神主義期のテキスト批判をおこなった。山本は、雑誌『精神界』の清沢満之記名で発表された論文に弟子が成文したものがあつたことを、その後の弟子の証言などによって指摘し、直筆原稿が現存するものと比較するなどして「それらの差異」を検証しようとした。そして「それらの差異」をみるに際して、

イ、「一人称表現」

ロ、「引用および人名への言及」

ハ、「敬体表現の併用」

ニ、「協調性」

ホ、「恩寵主義的傾向」

という基準を山本は用いた。「恩寵主義的傾向」は、「自己のもつ罪業性や救われがたさという側面よりは、いまここで  
の救いの成就ということが強調されすぎるといふ点」<sup>9</sup>、「自力的な色彩を帯びた思想的側面が軽んじら」<sup>10</sup>ていくことによつて「情動的かつ恩寵主義的な傾向が強調される」ことであると定義されている。そして清沢にはその恩寵主義的傾向が薄く、特定の門人にはその傾向が強くあらわれているとする。そして、山本は、恩寵主義的傾向などを尺度として清沢記名の論考に特に門人の思想が紛れ込んでいる可能性が高いと指摘した。

ただし、山本は清沢記名の論考に門人の思想が紛れ込んでいる箇所を特定したのではなく、可能性を指摘したのである。そのことは、門人の証言などからすれば明らかにそうであろうし、その指摘の意義は認めうるものである。<sup>11</sup>しかしどこに門人の思想が紛れ込んでいるのかを特定することは、直筆がない限り次に引用する山本の言葉の通り不可能なことである。山本は「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」について次のように述べる。

「講話」欄に収録されたこの一文には、清沢により原稿が提出されたことを示す手紙が残されている。……ところが、どういうわけかこの講話文の原稿は未確認である。そうである以上、編集者による文言の書き換えや書き足しがあったとしても、それがどの箇所であるかを特定することは不可能で、『精神界』に掲載されたものをそのまま清沢の思想として受け止められない面がどうしても残ってしまう。

具体的には、一人称表現に「我等」が採用されているあたりは、その一つのあらわれであろう。また、第一段落と最終段落の最終の一文に、それぞれ一カ所ずつ敬体表現が見られるのも注意が必要である。<sup>12</sup>

このように原稿を未確認とし、書き換え書き足しがあったかという点についても特定することができないとする。また山本は、清沢の傾向として一人称表現を採用する場合、ほとんどが「吾人」の表現を使うのに対して、ここでは「我等」という一人称表現が用いられること、敬体表現の併用があることに注意している。とはいえ山本の評するところによれば、思想内容からみれば「実に緻密かつ濃密な議論の展開が見られ」、<sup>13</sup>「他力の信仰」に生きることの喜びとともに、どこまでも有限な道德に関わりながら有限な世界を生きていくことの意義が並行して力説され、「恩寵主義の思想とは、明らかに別物の思想であるといわねばならない」<sup>14</sup>と高く評価している。

一方、近藤俊太郎は山本の推論を受けて「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」を「清沢が執筆した」ものとし、

清沢思想の限界性を指摘しようとしている。<sup>15</sup>このように「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」の直筆原稿が確認されないまま、清沢の執筆したテキストとして扱われていることを考慮すると、未確認とされた直筆原稿の研究が持つ意義は高いといえるだろう。付言すれば、例えば研究上入手可能な最も原本に近い影印本の「我は此の如く如来を信ず（我信念）」<sup>16</sup>ですら、朱書きなどの箇所は識別できない。直筆原稿「我は此の如く如来を信ず（我信念）」（大谷大学博物館蔵）では朱書きの痕跡が確認でき、このように影印本のみからは見出しえない情報が直筆原稿を確認することから判明する。「俗諦と道德との交渉」は卷子にしてあったためか原稿用紙が当時の状態に近く保たれていて、朱書きの判読が可能な部分も多い。ゆえに「俗諦と道德との交渉」は新たないくつかの視点をわれわれに提供する研究すべき資料である。さて、「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」について本直筆原稿を確認する限り、以下のようにいえる。

- ①この論考には、意味を大きく変えるような書き換え書き足しは基本的になかったが、誤植などやはり原稿との差異はいくつかある。
- ②この論考で、「吾人」ではなく「我等」と一人称表現をとったのは清沢が採用した表現である。
- ③この論考における「敬体表現の併用」は清沢が採用した表現である。

以上のように研究上の議論について判然としなかったいくつかの点が明瞭となる。

ところで精神主義期に清沢が書いた現存する直筆原稿は「エビクテタス氏」、「他力の救済」、「俗諦と道德との交渉」、「我は此の如く如来を信ず（我信念）」である。<sup>17</sup>「一人称表現」の問題に関して山本説は「吾人」と「我」という一人称表現については清沢らしい表現であるとし、反対に「我等」については清沢に馴染まない表現であると評価が低い。例えば、山本は「吾人」以外が使用されている場合には、そもそも清沢によって書かれた文章ではなかったか、編集者によ

り随意に書き換えられている可能性が高いことを示唆しているのではないだろうか<sup>18</sup>と述べている。「日曜日の小説」という講話欄の文章については、「この講話では一人称に「我等」が使われていることをはじめとして、清沢の文章には馴染みのない表現がいくつか見受けられる」と述べ、「我等」という一人称表現に対して、清沢に馴染まないと山本は評しているのである。

しかし先にあげた現存する精神主義期の原稿では、「吾人」の語は基本的に採用されておらず、一例もない<sup>20</sup>。現存の精神主義期の原稿には「我」の語を採用する場合と「エピクテタス氏」や「俗諦と道德との交渉」における「我等」や「吾等」を採用する場合があるが、「吾人」の採用はない。また「敬体表現の併用」についても、今回の調査で直筆原稿としては初めて確認した。山本の指摘には「精神主義」(三五年講話)の検討などの重要な点も多いが、今回の原稿を見る限り「一人称表現」の「我等」の採用への評価の仕方など、(山本自身がこれらの先述の項目を絶対化しているわけではないといえ)山本のテキスト批判には再考の余地が十分にあるのではないかと考えられる。

### 三、原稿の特徴と『精神界』所載論文との違い

#### 【①タイトルの違い】

・直筆原稿……「俗諦と道德との交渉」

※朱書きで文字を補っている。おそらく「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」となるように変更するための朱書きであったと考えられるが、ほとんど消えてしまっている。

・『精神界』所載論文……「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」

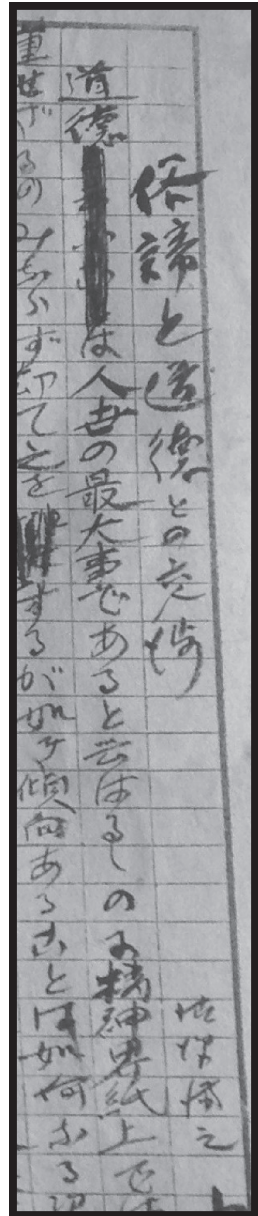


図1 題目部分

【②カタカナ表記からひらがな表記への変更】

清沢の原稿では「ケレドモ」、「シカシ」、「サテ」などがカタカナで書かれているが、ほとんどが朱書きでひらがなや漢字に変更されており、『精神界』所載論文もその指示にしたがって文章化されている。

【③原稿に句読点と圈点を朱書きで補っている】

・原稿は墨字で書かれるが、句読点と圈点は朱書きで挿入されている。朱書き句読点と『精神界』のこの論考の句読点はほぼ一致しているが、数箇所例外がある。

ところで朱書きは清沢のものか？あるいは編集側のものか？

結論としては、清沢のものではない可能性が高いといえる。その理由については以下の通りである。【①】【②】で述べたタイトルの変更やカタカナ表記をひらがな表記に変更するための朱書きと、句読点・圈点の朱書きの書き入れは基本的に同じ筆致で同じ素材の顔料が使われており、一連の朱書きは同一者とみるのが妥当である。カタカナ表記からひ



らがな表記への変更については、数多くあるカタカナ表記を清沢自身が朱書きで訂正したとは考えにくい。なぜなら、その訂正を後から自ら加えるのであれば、あらかじめひらがな表記で書くと考えられるからである。句読点の訂正を指示した朱書きについて注目すべきは、文章の終わりの句点を清沢は墨字の「。」で表現するのに対し、その「。」すべてを朱書きで「。」に変更していることである。これについても清沢が朱書きすることは考えにくく、その訂正をするならばあらかじめ「。」にしている筈である。タイトルの朱書き訂正・変更についても、清沢ではなく編集側のものであると考えられる。というのは「宗教と道徳との交渉」の後に書かれた、「我は此の如く如来を信ず（我信念）」も同じようにタイトルなどが朱書きで訂正変更されているが、そのことについて、暁烏敏は明治三九（一九〇六）年の講演録で、タイトルを変更したことを以下のように回想しているからである。

先生が明治二十年に大学を出られし以来、自分の研究や思想をあちこちの雑誌等に発表せられた最後の一文がこの『我が信念』であります。先生が書かれました時には「余は如何にして如来を信ずるに至りしか」といふ表題でありまして、『精神界』へはこの題で掲載する積りでありましたが、印刷に附せぬ前に、先生がなくなりましたので、後に出版する時の都合等もありまして、『我が信念』と名を変へて、三十六年六月十日に出る『精神界』に、初めてこの一文を世に発表したのであります。<sup>21</sup>

このように暁烏はタイトル変更を清沢の死後におこなったことを語っている。ただしタイトルが「余は如何にして如来を信ずるに至りしか」となっているのはおそらく暁烏の記憶違いで、大谷大学所蔵の原稿では、「我は此の如く如来を信ず（我信念）」である。ゆえにこの回想をそのままに信頼することはできないが、タイトルの変更などを朱書きにより編集側がおこなったことを示唆している証言である。これらの理由から朱書きは編集側のものであると考える。

また圈点の朱書きについて考えると、「俗諦と道德との交渉」の圈点は、朱書きのもので別筆で書かれたと思われる箇所（原稿二頁目）があり、それは『精神界』紙上に反映されていない。さらに「我は此の如く如来を信ず（我信念）」には墨字で圈点が付される箇所があるが、『精神界』上ではそれが反映されていない。これらのことから直筆が確認されていない『精神界』の論考で、圈点をその論考の強調点とみなし、清沢の意図を読み取ろうとすることは必ずしも的を射ていないと考えられる。

【④『精神界』所載論文では原稿の誤字脱字と思われる箇所を補っている】

〔例〕【原】八頁「啓発せんが為に存する所ものである」 【精】二五頁下段「啓発せんが為に存する所のものである」

〔例〕【原】一四頁「大事が成ると成らとの別を生ずる」 【精】二八頁上段「大事が成ると成らぬとの別を生ずる」

【⑤原稿に朱書きで言葉を削除変更している箇所】

朱書きで削除している箇所はほとんどないといってよいが、読みやすさを考慮して削除されたと思われる箇所が一点確認できる。

【原】六頁「一言してよいことがある其は此のことは何れの」 【精】二四頁下段「一言してよいことがある此のことは何れの」

【⑥原稿に訂正後、「イキ」と記された箇所があることについて】

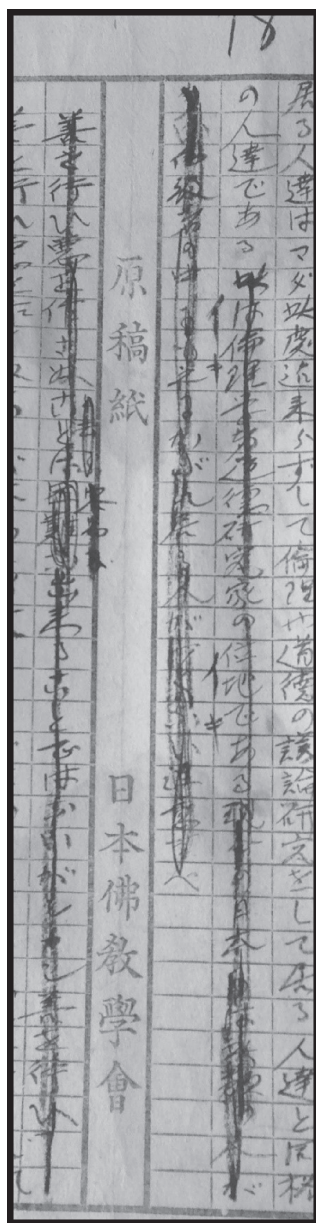


図2 原稿用紙五～六頁目の中央

居る人達はマダ此処迄来らずして倫理や道德の議論研究をして居る人達と同格

の人達である。此は倫理学者道德研究家の位地である。現今の日本には此類の人が

多い仏教者の中にも<sup>イキ</sup>之にかぶれ居る人が<sup>イキ</sup>少くない注意すべ

善を行ひ悪を作さぬことは困難な出来ることではないがシカシ善を行ひ

この文章は「此は倫理学者道德研究家の位地である。」(。「」は朱書き)という箇所については一重線で消された見せ消ちであり、その下に朱書きで句読点が付され、その文章の左側に二箇所「イキ」と指示されている。そしてその下の「現今の日本……」以下の文章は何本もの打ち消し線で抹消している。これらのことから「イキ」と記される「此は倫理学者道德研究家の位地である。」の文章は清沢も編集側も残す意志を持っていたということになる。しかし一度消している箇所であるので組版の活字を植える段階で印刷所が訂正箇所と判断したのか、校正の段階で削除されたのか、文

章化されなかったようである。

【⑦『精神界』所載論文で原稿と異なる箇所における誤植の可能性】

原稿と『精神界』所載論文と違う箇所は数え方にもよって異なるが、例えば「是れ」が「之れ」に変更されるような一箇所につき一つの変更点として数えた場合、朱書きのタイトルの変更やひらがな表記からカタカナ表記への変更も含めておよそ八〇箇所前後の違いがある（リポジトリ公開の「上宮寺所蔵・清沢満之直筆「俗諦と道德との交渉」の翻刻」の脚注を参照されたい）。

ここで『精神界』所載論文の中で、意味の通らない箇所や原稿から意味が変わると考えられるものをいくつかあげると、

【原】一〇頁「他力の信仰に入る根本的障礙は自力の」 【精】二六頁下段「他力の信仰に入る根本的障礙は自力の」

【原】一一頁「ものでないことを感知する様になる」 【精】二六頁下段「ものでないことを感知すに様になる」

【原】一六頁「実行の出来なくなつた所以上が教の主要である」 【精】二九頁上段「実行の出来なくなつた所以上の教の主要である」

【原】一六頁「俗諦と道德とに就て云ふときは俗諦とは何事であるか」 【精】二九頁上段「俗諦と道德とに就て云ふ事は俗諦とは何事であるか」

【原】一七頁「商人が穀物の事を云はぬこともないケレドモ」 【精】二九頁下段「商人が穀物の事を行はぬこともないけれども」

【原】一八頁「道德家は之を如何に聞くか 是れ道德を破壊するもの」 【精】三〇頁上段「道德家は之を如何に聞くが是れ道德を破壊するもの」

などである。このようにひらがな表記からカタカナ表記の変更以外で誤字かと思われる箇所がある。それらの箇所は原稿で朱書きにより変更を指示してはいないものであり、ほとんどが編集側の意図的変更ではなく、組版の段階で活字を誤って植えた可能性を視野に入れる方がよいのではないだろうか。例えば「障礙」の「礙」を「礎」としているのは「康熙字典の部首配列で納められた活字ケース」<sup>22</sup>から文字をひろく活版印刷の作業の中で、文字同士がかなり近い位置にあったことが想定され、ひろい誤ったとみるべきではないだろうか。次の「る」を「に」としたのは崩し字の「に」が「る」と似ているからであろう。例えば「歎異抄」が「異歎抄」となるなどのことは活版印刷ではめずらしいことではない。確かに原稿から文字が変わっていても一応意味が通じる箇所もあるが、それらについても基本的には朱書きの訂正はなされていない。これらのことから主な意図的変更は題目の変更と本文のカタカナをひらがなや漢字に変更する程度のものであったと考えられる。この論考の場合、変更は著者の意向をゆがめるような点はほとんどないとみることができる。唯一大きなものは⑤で示した「イキ」と書かれた箇所の問題であろう。それ以外は、多少の誤字はあるが清沢による訂正や挿入が多岐にわたる原稿にもかかわらず忠実に翻刻されている。『精神界』は校正刷りが何回あったのかがわからないが数点の誤植により、やはり直筆原稿を確認しないと意味が取りづらい箇所も存在することが確認できた。

また大谷大学には直筆原稿の「俗諦と道徳との交渉」の白黒コピーを所蔵しており、大谷大学編『清沢満之全集』の編集方針として『精神界』版を最終原稿とみなしたうえで、意味の取りづらい箇所限定して直筆原稿との校訂をおこなっているであろうことも付記したい。

#### 【⑧原稿の欄外などの書き入れについて】

・各原稿用紙欄外（罫線の外側上段中央部）に朱書きでの数字が「1～10」まで記される。Ⅱ原稿用紙の順番を意味す

るか？

・各原稿用紙欄外（罫線の外側上段中央部）に墨字での数字が「46」～「55」まで記される。|| 他の原稿と合わせ印刷するために付された整理番号か？

・原稿用紙欄外右下に書かれる「加川、杉山、石井」などの苗字について|| 組版の担当者か？

#### 四、原稿の訂正変更箇所から何がいえるか？——絶対他力という言葉に着目して

この清沢の原稿は、一行書く間に、その左の行に挿入箇所を設けて文章を練り直しながら丁寧に書かれており、一文ゆつくりと文章を練りつつ書かれたことがわかる。（図3）

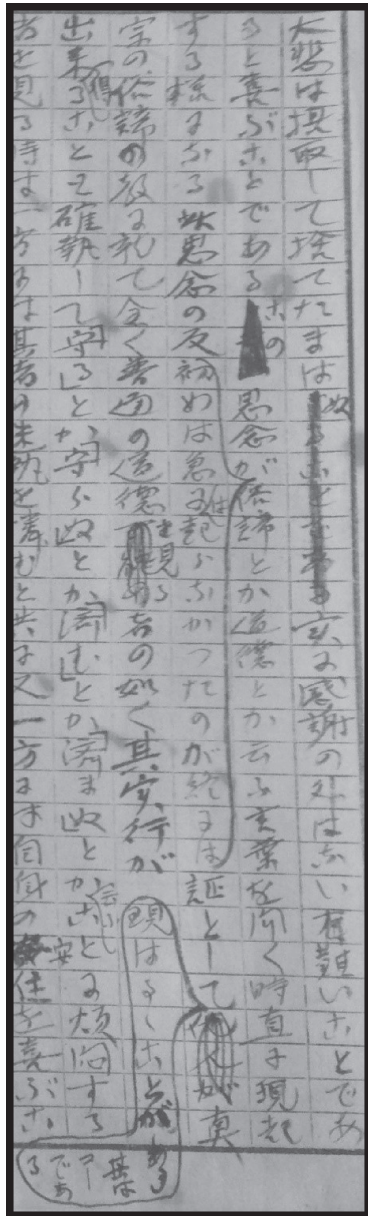


図3 原稿用紙一三頁目の一部分

原稿の訂正箇所の判別可能な箇所から一点だけ指摘したい。原稿の二頁目の図4では、



「を以て一切衆生を一人一個」も漏さず救済せんするの道が即ち絶対他力無限「仏陀」大悲のあらん限りを尽したる教法が真俗二諦の教法であるのである」<sup>23</sup>とある。この箇所から「絶対他力無限大悲」を訂正し「仏陀大悲」としたことがわかる。

近年も「絶対他力」という言葉は強いインパクトを持って使われるが、そもそも清沢の残した言葉には「絶対他力」という語が『精神界』所載の「絶対他力の大道」というタイトルにしかなく、その「絶対他力の大道」も多田鼎による成文であることから、「絶対他力」という語を清沢が使ったのかどうかが後学者としても難しい問題であった。おそらくその背景から寺川俊昭は以下のように述べている。

清沢満之といえ、<sup>24</sup>「絶対他力」という言葉をすぐ思い合わせることが定着しておりますが、金子（大榮）先生はこの「絶対他力」という言葉がお嫌いだったらしいのです。違和感を感じておられたようで、あるとき、「清沢先生に

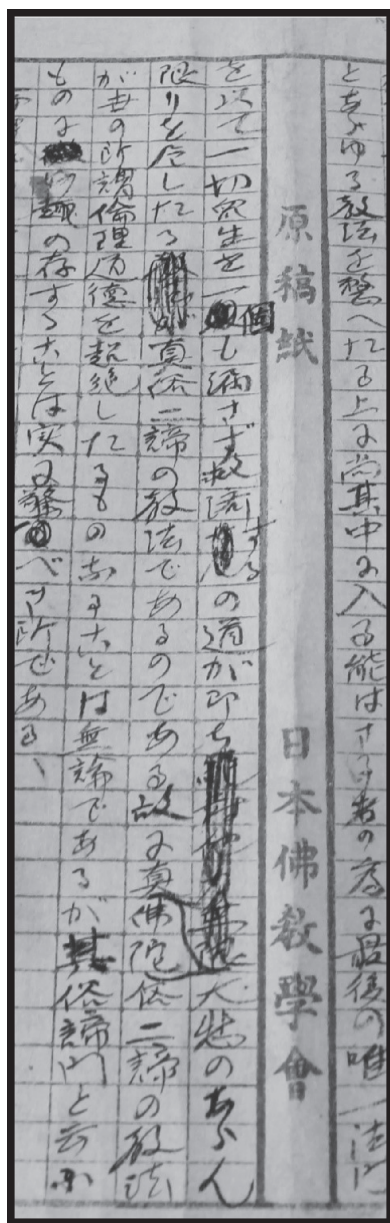


図4 原稿用紙二頁目の一部分

絶対他力という言葉がありますか」とお尋ねいただいたものですから、「清沢先生が書かれた文章には、あの言葉はありません」とお答えしました。そうしたら、「それは知らなかったけれども、それを聞いて安心した」と言っておられました。清沢先生には、「絶対他力」という言葉はないのです。「無限他力」という言葉があります。<sup>25</sup>

ここから「絶対他力」という表現によって、真宗や清沢思想をひとくりにしてしまふことに対する批判を読み取ることも可能である。その点は傾聴に値するといえよう。金子は晩年「絶対他力」という言葉を積極的に使用して、「絶対他力の大道というその無限者という場所が与えられなければ自重するということとはできない」などと述べ重要な語として用いる一方、親鸞が主著『教行信証』の中で絶対の語を「絶対不二の教」、「絶対不二の機」<sup>26</sup>と使用し「絶対」と「他力」をつなげていないことから、親鸞の「絶対」の使い方と清沢の「絶対他力」という語とを区別した方がよいと考えていた。また「絶対他力」という語は禪的解釈に近いとも考えていたようである。<sup>28</sup>寺川と金子の会話はこのような背景から生まれたのであろう。

ではそもそも「絶対他力」は清沢が使った言葉なのだろうか。暁烏敏は当時を回想して『絶対他力』という著書の中で「この「絶対他力」といふようなことは、清沢先生が始めて言はれた事です」<sup>29</sup>と述べてはいるが、約五〇年後の発言であり、これだけで確定するのは難しい。<sup>30</sup>しかしここで暁烏は「絶対他力」という言葉が生まれた背景や意義を語っており、それをまとめてみたい。

明治一〇年代から三〇年代まで占部観順と細川千巖派とが蓮如上人の「たすけたまえ」という言葉の解釈で対立し、真宗大学初代学監であった占部の解任から、さらに占部の異安心調理事件へと発展していったことは、明治真宗大谷派の歴史の中で重大な事件である。「たすけたまえ」という言葉は文字通り「請求」の意味だとした細川らに対して、占部は表現上「たすけたまえ」という言葉になるが、その本義は「信順」（依憑）であると受け止めた。その占部の立場



を受け継いでいる領解をあらわすのが「絶対他力の大道」の文章であり、そのような側面を持つっていると暁烏は考えている。つまり「たすけたまえ」に自力的な要素が入るのではなく、その言葉すらも「他力」なのであり、「我」をはさまないという意味において「絶対他力」というと解釈できる。特に「絶対他力の大道」の「請ふなかれ、求むるなかれ」という言葉遣いにも、「請求」と「信順」の論争の背景があると暁烏はみているのである。<sup>31</sup>確かに、『臘扇記』が書かれた頃、この異安心問題は極めて重大な事件であり、『臘扇記』にも占部との関わりを示唆する記述が多数ある。暁烏はこの論争を清沢が「絶対他力」という言葉を用いた直接的理由として語ったわけではないが、「絶対他力」はこの論争の背景を想起させる言葉として暁烏にとって重要な意味を持ったのである。清沢在世時から「絶対〔対〕他力」の語は救済の要を表現する言葉として、暁烏敏、佐々木月樵、楠龍造などの文章の中で何度か使われている。<sup>32</sup>

ただこの「俗諦と道徳との交渉」という原稿では「絶対他力」という語は訂正されており、この言葉を清沢が言い始めたのか、多用したのか、好んだのかはわからない。また原稿の「絶対他力無限大悲」はそもそも二字熟語を並列して「絶対〓他力〓無限〓大悲」として用いた可能性もある。ただ筆者としては「絶対他力」、「無限大悲」の「絶対」や「無限」は「他力」や「大悲」を形容する言葉として用いていると考えている。「絶対」や「無限」は、「他力」や「大悲」の性質をあらわす静的な言葉であり、「他力」や「大悲」は、「絶対」や「無限」のはたらきをあらわす動的な言葉である。そのように考えると、それらを組み合わせた四字の熟語として「絶対他力」と「無限大悲」と清沢は書いているということになる。「無限大悲」の方は四字熟語として清沢が多用する言葉であり、「絶対〔対〕他力」は四字熟語として『精神界』の中で浩々洞の門人たちが普通に使う言葉である。これらの言葉が浩々洞の対話の中では共通に理解しうる言葉であったということは言い過ぎではなからう。近年、精神主義の言説が浩々洞の「対話」によって紡がれたものであることに重点を置く安富信哉や名和達宣の指摘があり、そのこととも関連して興味深い。そうであるならば清沢満之の文章表現は、最晩年の清沢が暁烏に「貴文をまねました」と述べているように、浩々洞の若き仏教青年たちとの交

流・対話の中で変化していつていると考えるのが自然である。清沢は明治三五（一九〇二）年一月には浩浩洞を去り、三河大浜に帰寺しており、清沢が言葉を紡ぐ営みは、直接の対話だけでなく、書簡や雑誌の文章を通したかつての洞友たちの言葉との対話から生まれていったのであろう。

### おわりに

本稿では、直筆原稿「俗諦と道德との交渉」と『精神界』所載「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」の比較検討をおこない、直筆原稿からみえてくる事柄について注解をほどこした。この直筆原稿は保存状態が良く、新たな事実を教える第一級の史料である。これまでこの直筆原稿の所在はたびたび言及されてきたものの、研究は全くなされてこなかった。今回は研究の重要性を指摘しつつ、以上の報告をおこなった。これによって、清沢の精神主義期について研究史の中で問題とされている不明瞭な点をいくらか補うことができた。

本稿では、まず先行研究の中で「俗諦と道德との交渉」という直筆原稿の存在が問題とされていない状況を指摘し、本研究の意義を論じた。次に、この原稿と『精神界』所載論文との比較から、「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」は原稿から意味を大きく変えるような書き換え書き足しは基本的になかったが、誤植などやはり原稿との差異はいくつかあることや、「吾人」ではなく「我等」と一人称表現をとったのは清沢自ら採用した表現であること、そして「敬体表現の併用」は清沢が採用した表現であることを指摘した。さらに、原稿の朱書き箇所が清沢自身のものなのかどうかについての検討を加え、清沢ではなく編集側が朱書きをおこなっている可能性が高いと結論付けた。ゆえに『精神界』所載論文の圏点は、清沢が意図したものである可能性は低いといえよう。そして直筆原稿に記される「絶対他力」の語に着目して、研究史上極めて重要となっている「絶対他力」という語が、実際に清沢が書いたものの中に存在することを指摘し、それに考察を加えた。

今回の考察にあたり、『精神界』所載論文のテキスト批判は、さらなる原稿が発見され、なおかつ雑誌出版までの浩浩洞と出版社の動向がわからない限り、極めて難しい面があることを痛感した。そしてそれを十全に知りうるのは不可能に近いと思われる。清沢の思想を純粹に取り出すという方法は、原稿から『精神界』所載論文の変更点を丁寧に見て明確に違う面がある場合、ある程度は可能であろう。実際に、『臘扇記』の文と「絶対他力の大道」の差異についてなどに言及している研究もあり、重要であるといえる。しかし興味深いことに、今回の直筆原稿に限定して考えるならば、相違点よりも、浩浩洞での対話や思想交流を感じる面が印象的であった。本稿が今後の清沢研究に寄与するところがあるならば幸甚である。

## 註

- 1 安富信哉編、山本伸裕校注『清沢満之集』岩波書店、二〇一二年、二九七頁。
- 2 今村仁司『清沢満之語録』岩波書店、二〇〇一年、四九〇頁。
- 3 目次では「宗教的道德と普通道德との交渉」となっているが、本文の標題は「宗教的道德（俗諦）と普通道德との交渉」となる。岩波版『清沢満之全集』は本文の標題によっている。（『全集』解題参照）。
- 4 「よみがえる上宮寺の法宝物」図録編集委員会編集『よみがえる上宮寺の法宝物 蓮如上人如光上人五百回御遠忌記念』太子山上宮寺、二〇〇四年、一〇六頁。
- 5 その後、二〇〇〇年度、構成案が修正され、二〇〇一年一〇月に岩波書店より全集を出版する方針となった。（西本祐攝「大谷大学編『清沢満之全集』編纂の背景と課題」『現代と親鸞』第三三号、二〇一六年、二八三頁参照）。
- 6 安富信哉「清沢満之『精神界』所載論文校訂集」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第二三号、一九九六年、九三―一二九頁。
- 7 加来雄之「清沢満之と多田鼎の宗教言説観」『親鸞教学』第八五号、二〇〇五年、二七―三一頁。
- 8 山本伸裕『精神主義』は誰の思想か』法蔵館、二〇一一年。
- 9 山本「二〇一」、五九頁。

- 10 山本「二〇一一」、六九頁。
- 11 筆者としては、特に三つの精神主義の名で出版された論考を検証した点は説得力を有する山本の重要な指摘であると考えている。また直筆原稿の存在しないものについての氏の指摘はあくまでも「可能性」を指摘したものであると理解している。
- 12 山本「二〇一一」、一四頁。傍点筆者。
- 13 山本「二〇一一」、一五頁。
- 14 山本「二〇一一」、一六頁。
- 15 「この俗諦論の末尾部分に、「宗教と道德の区別が明かでありて宗教者は宗教の分を守り、道德家は道德の分を守りて各其能を尽せば各其功績を国家社会に貢献することである」とあるように、清沢は「宗教」と「道德」は別領域に存すると押さえており、両者が否定や緊張の関係を切り結ぶことを全く想定していなかった。こうした言明から浮かび上がってくるのは、清沢が現実の相対化を徹底するとともに、相対化した現実をそのまま肯定していることである」(近藤俊太郎「天皇制国家と「精神主義」——清沢満之を中心に」『現代と親鸞』第三三号、二〇一六年、一四〇頁)。
- 16 『自筆原稿清沢満之』法藏館、一九八〇年。
- 17 「絶対他力の大道」は『臘扇記』から引用されるので、精神主義期の原稿とはみなさなかった。その他に、「咯血したる肺病人に与ふるの書」の草稿(一部分)として「人生の根源」(『清沢満之全集』第六卷、岩波書店、二〇〇三年、三二五―三二六頁)という原稿があったとされているが、『全集』では原稿自体は未確認となっており、『全集』に掲載された文章自体も、草稿であるのではとんど『精神界』所載のものと合致していない。また「人生の根源」は一人称表現は「我」、「我等」を採用している。
- 18 山本「二〇一一」、五〇頁。
- 19 山本「二〇一一」、一〇三頁。
- 20 「エピクテタス氏」(一九〇二年二月)の原稿には「吾人」を訂正して「吾等」としている箇所がある。この時期に一人称表現の模索があった可能性がある。
- 21 暁島敏「清沢先生の信仰」『暁島敏全集』第八卷、涼風学舎、一九七七年、四六二頁。
- 22 印刷学会出版部編『印刷雑誌』とその時代——実況・印刷の近現代史』印刷学会出版部、二〇〇七年、一五六頁。
- 23 ここでは原稿で挿入箇所と判断できるものを「≡」の記号を用いて翻刻している。
- 24 例えば、中島岳志『親鸞と日本主義』新潮社、二〇一七年。

- 25 寺川俊昭講述『自己とは何ぞや——大谷派なる宗教的精神』無量塾、二〇一〇年、三七九―三八〇頁。□内は筆者。
- 26 金子大榮「清沢満之先生を偲んで——宗教のあり方について」『清沢満之の思想とその展開』清沢満之師生誕百年記念会、一九六三年。
- 27 『顕浄土真実教行証文類』『定本 親鸞聖人全集』法藏館、一九六九年、八一―八二頁。
- 28 金子大榮「回向と摂化——『教行信証』の諸問題（二）」「親鸞教学」第九四号、二〇〇九年。この「『教行信証』の諸問題」は金子が一九七一年に大谷大学において講義したものの筆録である。
- 29 暁烏敏『絶対他力』弘文堂、一九五四年。『絶対他力』は一九五二年暁烏敏の自坊で開かれた仏教講習会での復元原稿を整理したものである。
- 30 他の時期の早い指摘や、他の浩浩洞の門人の指摘があれば、なお説得力があるが、現段階ではわからない。
- 31 暁烏「一九五四」、五三―七七頁。
- 32 佐々木月樵「親子論」／暁烏敏『歎異抄』を読む（二）（『精神界』第三卷第三号、一九〇三年三月）。楠龍造「名号の意義」（『精神界』第三卷第五号、一九〇三年五月）などを参照。清沢満之の没後も、楠龍造「他力教の地位及使命」／佐々木月樵「中心の循環」（『精神界』第三卷第六号、一九〇三年六月）などに「絶対他力」の語がキーワードとしてでてくる。「絶対他力」と「絶対他力」の使い分けについては、今後検討が必要である。
- 33 安富信哉「人間成就の教育——清沢満之の教育観」（『会報二〇一一年（平成二十三年）度』二〇一四年）、名和達宣「清沢満之とその門下との「対話」——安藤州一「清沢先生 信仰坐談」を読み解く」（『現代と親鸞』三二、二〇一六年）の指摘がある。
- 34 「清沢満之、暁烏敏宛書簡」『清沢満之全集』第九卷、岩波書店、二〇〇三年、三〇五頁参照。

# 【謝辞】

直筆原稿「俗諦と道德との交渉」と付属書簡については、愛知県・上宮寺蔵であり、上宮寺の佐々木宣祐氏の多大なるご理解ご協力のもと、二〇一七年四月に閲覧・調査させていただいた。また直筆原稿「我は此の如く如来を信ず（我信念）」については、大谷大学博物館蔵であり、精密なカラー複写資料を閲覧させていただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

